

# 文革期文芸の一考察

## ——『春苗』の書きかえを中心として——

辻 田 智 子

### 要 約

文革後期に制作された映画『春苗』は文革終了後「陰謀映画」と称された。『春苗』は制作過程で初めの意図とは異なり、政治的目を持った内容に変容する。そのシナリオ作成の段階から江青グループが関わり、映画完成後も鄧小平批判のために利用された。

キーワード：『春苗』、文化大革命、文芸政策、陰謀映画、鄧小平批判

## 1. 問題の所在

周知の通り中国語の「文芸」は文学と映画、演劇、美術などの芸術を総称してということばであるが、文化大革命時期（1966 - 76年）の「文芸」において映画は重要な位置を占めており、それゆえ文革後、文革時期の映画は「文革の重災区（重大な被害を受けた分野）」<sup>1)</sup>と呼ばれてきた。

1978年6月6日から14日にかけて文化部映画系統が「四人組」の罪状を告発・批判する大会を開催した。6月9日の文化部副部長王闌西の発言において「陰謀映画」として『春苗』、『飲騰の小涼河』、『反撃』、『千秋業』、『盛大的節日』の5本の映画名が挙げられた<sup>2)</sup>。「陰謀映画」は「陰謀文芸」から生まれたことばである。「陰謀文芸」ということばの初出は不明であるが、1977年8月12日から18日にかけて開かれた中国共産党第11回全国代表大会における政治報告で華国鋒は「四人組が握っていた文芸は、四人組が「走資派」を描くことを名目に党の指導者を思うままに攻撃し、醜く描いたことによって、正真正銘の陰謀文芸に変わってしまった」<sup>3)</sup>と「陰謀文芸」ということばを用いて江青グループの文芸政策を批判している。「陰謀映画」は「陰謀文芸」の一部であった。

1966年から76年に至る文化大革命期に作られた劇映画のうち、文革後期に作られたこれら「陰謀映画」と呼ばれる作品は、「四人組」逮捕後「四人組」を告発、批判する運動のなかで単独またはひとまとまりで新聞、雑誌に批判文が掲載された。「陰謀映画」は現在にいたってもきわめて評判が悪い。たとえば映画史のなかでは「これらの映画は中国の映画発展史において典型的な強権政治が映画芸術を踏みにじって生まれた「奇形」である。そこには芸術のいぶきが少しも感じられず、映画は赤裸々な陰謀政治の道具と犠牲になった。それは中国の映画事業を

発展させなかっただけでなく、停滞、ひいては大幅な後退をもたらした<sup>4)</sup> など否定的にとらえてその特異性を強調する記述が多い。

映画『春苗』（1975年・上海映画製作所）は最初に作られた「陰謀映画」で、公開は1975年10月1日であった。他の「陰謀映画」については『歓騰の小涼河』が1976年7月1日に公開され、残り3本は、ほぼ完成していたものもあったが「四人組」逮捕による制作中止で一般公開されなかった。『反撃』以外の4本は上海映画製作所による制作であった。上記の文化部映画系統が開いた「四人組」の罪状を告発・批判する大会において上海映画製作所批判グループは「『春苗』は全国陰謀映画のリーダーである」といい、強い口調で批判している<sup>5)</sup>。

文革期に作られた劇映画の研究は90年ごろからなされるようになってきている。そのほとんどは概論的に述べたものであったり、あるいは革命模範劇映画のみを扱ったものであったりして、一般の劇映画についての研究はあまりない。『春苗』について論及しているものは管見のかぎりでは応観『『春苗』:「陰謀影片」的開山斧』（『大衆電影』2001年第5期）ぐらいである<sup>6)</sup>。応観は『春苗』の成立過程について述べているが、不十分な点や他の資料との食い違いも見られる。また「四人組」逮捕後「四人組」を告発、批判する運動のなかで『春苗』についての批判文が新聞、雑誌に数多く掲載された<sup>7)</sup>。告発、批判を目的としているため粗雑で客観性に欠ける面はあるものの、事実の暴露も多く含んでおり慎重に扱えば有用な資料となりうる。

本稿はシナリオの書きかえを中心に映画『春苗』の成立過程について考察しようとするものである。具体的には『春苗』の構想はいつごろからなされたのか、初めから「陰謀映画」として計画されたのか、映画完成後どのように政治的に利用されたのか等について、関連資料や映画制作に関わった人物の回想などを用いて事実関係を明らかにし、それによって文革期の文芸政策がどのように行なわれていたのかの一端を解明しようとするものである。

## 2. 『春苗』の制作

### (1) シナリオの作成から撮影まで

1966年に文化大革命が始まると、各映画製作所は政治運動による混乱で劇映画の制作停止を余儀なくされた。また過去の建国以来の十七年時期の劇映画もほとんどが否定、批判されたため放映が許可されなかった。

1970年からは革命模範劇の映像化が進められ、なかでも「八つの模範劇」<sup>8)</sup>の映画が全国各地で盛んに放映され、「八億人民に八つの芝居」<sup>9)</sup>と言われる時期が続いた。

劇映画については1966年の文革開始から73年に至るまで一本も作られず、「まるまる7年間一本の劇映画も生まれなかった。これは中国及び外国の映画史上まれに見る現象である」<sup>10)</sup>と従来の中国映画史の記述のなかで語られてきた。1973年によく『艷陽天』、『戦洪図』、『青松嶺』（『青松嶺』は1965年版のリメイク）が完成し、文革が始まって7年間の劇映画空白の時

期は終りを告げる。1973年から76年の文革終了までに制作された劇映画は革命模範劇や伝統劇の映画も含めて全部で94本であった<sup>11)</sup>。

しかし劇映画の空白期であった時期でも劇映画の制作に向けて、水面下では努力がなされていた。1970年初、上海市党委員会の馬天水らが上海第三製鉄所で労働者から生産についての意見の聞き取り調査を行なった際、労働者から「見るべき文芸作品がない」との声があがった。このような背景のもと、上海市党委員会は各文芸団体に文芸創作に力を入れるよう指示を出した。当時、上海映画製作所は大部分の職員が五七幹部学校に下放しており、毛沢東思想宣伝隊の管理下にあった。上海市党委員会の命を受け毛沢東思想宣伝隊はただちに職員に上記の通達を出した<sup>12)</sup>。ほどなく上海映画製作所の女優、曹雷（1940 - ）が「はだしの医者」をテーマに映画を制作するという構想をもとに報告書を作成して毛沢東思想宣伝隊に提出した。そのいきさつについて曹雷は次のように述べている。

1965年、毛沢東は「医療衛生工作の重点を農村におこう」という指示（筆者注：これは6月26日に出され、文革中に「六・二六指示」とよばれる）を出しました。安徽省の農村で社会主義教育運動に参加したとき、農村で医者や薬が不足している状況を目の当たりにしました。1968年、上海川沙県江鎮人民公社衛生院（筆者注：人民公社に設置された病院兼保健所の医療組織）の「はだしの医者」王桂珍の先進的な業績が『文匯報』に掲載されると<sup>13)</sup>、毛沢東がそれを読んで「はだしの医者はよい」と指示を与えました。そうして全国に「はだしの医者」に学び、王桂珍に学ぶというブームが起きました。1970年、王桂珍を代表とする「はだしの医者」の先進的な業績を映画にするという構想をもとにひとりで報告書を作成して毛沢東思想宣伝隊に提出しました。同時に農村で「はだしの医者」とともに生活を体験し再教育を受け自己を改造する過程で「はだしの医者」を描いた作品を創作して、文芸で労働者、農民、兵士に奉仕したいということも書きました<sup>14)</sup>。

この報告書について曹雷は「非常に意気揚々とした報告内容ですが、本心はこれをきっかけに当時の一日中批判、闘争をし、政治運動にあけくれていた生活から抜け出して創作活動に参加したかったのです<sup>15)</sup>」と述べている。曹雷は記者であり作家であった曹聚仁（1900 - 1972）の娘で文革初期は批判の対象となっていた。毛沢東思想宣伝隊が上海映画製作所に進駐後は批判の対象ではなくなったが、声がきれいだったために批判大会で批判文を読んだりスローガンを叫ぶのにいつも駆りだされていたという<sup>16)</sup>。そういう毎日に嫌気がさし、創作活動に打ち込みたかったのだろう。また「この報告書はなんら背景はなく、誰に指示されたものでもありませんでした<sup>17)</sup>」と自発的なものであったと語っている。

「はだしの医者を描く」というテーマは当時、文化大革命の「新生事物」として「はだしの医者」がブームになっていたことからすぐに採用され、1970年10月に創作グループが作られた<sup>18)</sup>。

メンバーはグループ長の趙志強、曹雷、王蘇江（後に別の組に異動）、楊時文の4人<sup>19)</sup>であった。それから3年の間、断続的に曹雷は上海郊外にある「はだしの医者」王桂珍の家に泊まり、薬箱を背負って王桂珍とともに農民の家々を回り、自ら「はだしの医者」の生活を体験したという<sup>20)</sup>。

幾度かの修正を加えたのち1972年にまず話劇のシナリオが出来上がった。そのシナリオに基づいて話劇の公演が行なわれ、曹雷が主役の「はだしの医者」李紅華役を演じた。話劇のシナリオはどのようなものであったのだろうか。翟建農著『紅色往事』に簡単に内容が紹介されている。

「はだしの医者」李紅華が誠心誠意人民に奉仕するというのがテーマとなっている。劇中、朝陽人民公社衛生院の衛生院院長、杜文杰は誤った思想を持った幹部で、隠れた階級の敵である衛生院の医師、錢濟仁にだまされ、李紅華が医療行為を行うことに反対する。李紅華は大学卒業後志願して農村にやってきた方明医師に支持されて巫女の賈二仙を打倒し錢濟仁の本性を暴き、杜文杰を批判する。おりしも毛沢東の「六・二六指示」が出され、感銘を受けた杜文杰は「はだしの医者」という「新生事物」に対する誤った認識を改め貧農下層中農から歓迎される。<sup>21)</sup>

最後に1965年の「六・二六指示」が登場することから、文革開始以前の話になっていることがわかる。李紅華は「はだしの医者」王桂珍を、方明は医師の黃珏祥という実在の人物をモデルにしていた。

話劇の公演について曹雷は「当時、曹楊劇場で公演しました。上海で非常に話題になりました。というのは当時人々は革命模範劇を見飽きていたし、われわれの演技にも熱がこもっていたからです。現実の生活に近く、真実味があったので人を感動させたのです。しかし劇を見た指導者はシナリオはまだまだ変えないといけない、生活の中に深く入れと言って来ました」<sup>22)</sup>と語っている。革命模範劇ばかりが演じられ、新しい劇映画も公開されず娯楽に乏しかった時期なので人々は新しい話劇に興味を示したのであろう。

創作グループは様々な意見を取り入れて、話劇のシナリオをもとに映画用のシナリオを作成する。1972年10月1日の国慶節の後、上海映画製作所に魯韜（1912 - 2002）、顔碧麗、梁廷鐸の3名からなる演出グループができ、魯韜がリーダーとなった。演出グループは創作グループに加わって一緒に映画シナリオの書きかえをおこなった<sup>23)</sup>。

1973年10月、電影文学劇本『赤脚医生（はだしの医者）』が完成する。初めの話劇のシナリオから数えてこれが第6稿となった。同年12月、上海人民出版社より出版された上海文芸叢刊『鋼鉄洪流』に電影文学劇本として「赤脚医生」が収められている。著者は上海映画製作所『赤脚医生』創作組で、目次には「徵求意見本」（意見募集本）と記されている。この『上海文芸叢

刊』（1974年から『朝花叢刊』と改名）は張春橋、姚文元が直接支配下においていた上海市党委員会執筆グループが1973年に創刊した江青グループの宣伝誌であった<sup>24)</sup>。この本に掲載されたことから、この段階から江青グループが「赤脚医生」のシナリオを重視していたことがうかがえる。掲載された電影文学劇本のあらすじは以下の通りであった。

1958年秋、湖濱生産大隊の阿方おぼさんの娘、小妹がはしかにかかった。李紅華がつきそって衛生院に運ぶが、院長の杜文杰と医師の錢濟仁はろくに診察しようもしない。ここには薬がないので県の病院へ行けと冷たく言い放つ。県の病院に運ぶ途中、小妹は死んでしまう。生産大隊に医者がないためにおこった悲劇であった。農民のための医師を育てるために生産大隊から李紅華が選ばれる。医学を学ぼうと衛生院にやってきた李紅華に対して杜文杰は冷淡だった。そんな李紅華に対して志願してやってきた方明医師が援助の手をさしのべる。文化大革命が始まると、李紅華は杜文杰が修正主義を行なっていると壁新聞を貼り出して批判する。杜文杰はそれによって自分はこれまで修正主義衛生路線をとっていたと反省し、李紅華とともに農民の医療のために尽力することを決意をする。また錢濟仁が摘発され、村の巫女の医者、賈月仙もこれまでの悪事を反省する。

話劇のシナリオとの大きな違いは、話劇が文化大革命が始まる以前の話であったのに対して、この電影文学劇本では文化大革命前の1958年から始まり、第四章で文化大革命が描かれる。文化大革命をきっかけに杜文杰がこれまでの自分の過ちを認め、改心するあらすじとなっている。やや唐突な感じがするのも否めない。文化大革命の成果を描くよう書きかえられたことは明らかである。

1973年11月2日、上海市党委員会の文教担当の書記、徐景賢（1933 - 2007）が『赤脚医生』（第6稿）についての討論会を開催する。100人あまりのはだしの医者、医療工作者、工農兵業余作家と専門の作家が集められた。座談会で工農兵らはシナリオのテーマと人物を肯定し、おおかたの意見は少し直せばすぐに撮影に入ってよいというものであった<sup>25)</sup>。しかし徐景賢はその後4時間にもおよぶ演説を行ない、自らが「破壊的意見」と称する提案を打ち出した。シナリオは「メスを使って大手術する必要がある」と言いだし、シナリオの構成をやりなおすよう求めた。修正を求めたのは主に以下の点である。

1. シナリオのテーマがめざすところが高くない。「はだしの医者」という「新生事物」の成長過程を描くのではなく、権力の問題を解決せよ。シナリオのテーマを「権力闘争」に改めよ。
2. 杜文杰は貧農下層中農の病氣や生死に全く関心がない「走資派」でないといけない。劉少奇から杜文杰までは一致している。上から下までひとつの路線だ。杜文杰の権力を奪わ

なければならない。

3. 田春苗<sup>26)</sup>は真の路線意識を持った英雄的人物で、闘争し、衛生における権力を掌握しないとイケない。<sup>27)</sup>

杜文杰は一般の誤りを犯した幹部であったのに、この時「走資派」となり、誠心誠意農民のために働く李紅華は「走資派」と闘争し奪権する英雄であることが求められた。

徐景賢はどうしてこのような唐突ともいえる「破壊的意見」を打ち出してきたのだろうか。それは当時の政治状況が関係していた。文革初期に劉少奇に次ぐ党内最大の走資派として失脚していた鄧小平が、この年の3月10日國務院副総理の職に復帰、8月の中国共産党第十回全国大会では議長団のメンバーおよび党中央委員に選出され、周恩来を補佐しながら国民経済の整頓と回復に着手した<sup>28)</sup>。徐景賢は杜文杰を「走資派」と描き、鄧小平と劉少奇を結びつけて批判しようとしていたことがうかがえる。

徐景賢は「昨夜北京の指導者（江青グループ）と電話で話し」、「いろいろ考えて一睡もできなかった」、「大胆に変えないとイケない」と語っていたという<sup>29)</sup>。江青グループと常に連絡をとり、指示を仰いでいたことがわかる。討論会終了後、徐景賢は創作グループの指導のために王洪文の秘書であった蕭木を派遣した<sup>30)</sup>。

いっぽう創作グループのひとりであった曹雷は次のように回想している。

シナリオは再三許可が下りませんでした。上の人は私たちの思想レベルが低すぎるといい、テーマも「はだしの医者」の感動的な業績をたたえるのに止まっている、これでは到底不十分である、階級闘争を際立たせる厳しさにまで持っていくべきで、文化大革命のテーマに貢献すべきだと言いました。わたしたちが書いたシナリオにも対立する局面がありました。それは人民公社の衛生院の杜主任は貧農下層中農の苦しみにそれほど関心を示さず、冷淡ですが、「はだしの医者」は誠心誠意貧農下層中農に奉仕しています。シナリオのなかに子どもが肺炎を患い、「はだしの医者」があらゆる手段を講じて幾夜も看病するという場面があります。これらはすべて生活体験に由来し、わたしたちの本当の気持ちを反映させたものでした。しかしこのような矛盾は不十分で文化大革命のテーマに合わないとの人は考えていました。<sup>31)</sup>

徐景賢の意図が飲み込めず、とまどっていたようである。

このころシナリオの書きかえだけでなく、撮影グループにも大きな変化が生じた。上海市党委員会が監督を魯韜から謝晋（1923 - 2008）に交代させたいとの意向を示してきたのである<sup>32)</sup>。謝晋を指名したのは徐景賢であった<sup>33)</sup>。文革初期、謝晋は1965年に撮った『舞台姉妹』が「大毒草」とされ、大小の批判大会で200回以上も批判され、上海映画製作所で最も多く批判大会

に引きずり出された人物と言われていた<sup>34)</sup>。しかし徐景賢は1970年に革命模範劇『海港』の監督のひとりとして謝晋を指名、五七幹部学校にいた謝晋を現場に復帰させている<sup>35)</sup>。謝晋の才能を高く評価していたのだろう。魯韜は文革前に『李双双』（1962年）を撮っており、ベテランではあったが文革開始後の映画撮影にはまだ実績がなかった<sup>36)</sup>。当時謝晋は北京で『海港』を撮り終えて上海に戻っていた。すでに『海港』を撮り終えている謝晋のほうがより安心して任せられたのだろう。謝晋は『春苗』のあと、1975年6月に革命京劇『磐石湾』の監督もしている。

謝晋が演出グループに加わり、顔碧麗、梁廷鐸が謝晋と一緒に監督することになった。俳優については話劇で主役を演じた曹雷、方明役の達式常（1940 - ）など数人が残ったほかは大部分が入れ替わった。うち重要な役柄である水昌伯には八一映画製作所の俳優、高保成（1926 - 2004）が、杜文杰役には文革前の有名な悪役、白穆（1920 - ）が決まった。

白穆を杜文杰役にするのは上海市党委員会からの指名であった<sup>37)</sup>。白穆はかつて映画『南征北戦』（1952年）で国民党軍の参謀長役、『逆風千里』（1964年）では国民党軍の師団長役を好演しており、悪役として知られていた。文革が始まると批判の対象となり、牛小屋と呼ばれる私設監獄に入れられていた<sup>38)</sup>。1969年7月15日には滬中区スパイ組織の重要人物としてでっちあげられ、自供をせまられている<sup>39)</sup>。このような人物は監視の対象であり映画出演などできなかった。しかし過去に犯した「罪」よりも観客に与える形象のほうが重視されたのである。白穆に杜文杰役を演じさせることにより観客に一目で杜文杰が悪者であるとわからせ、かつての役柄とだぶらせることにより悪役の印象を一層強めることができるという効果が期待できた。上海市党委員会はシナリオだけでなく監督、キャスティングまで指示していたことがうかがえる。

上海市党委員会の指示かどうかは未確認だが、『春苗』の音楽を担当する上海電影楽団の指揮者には呂其明（1930 - ）が起用されている。呂其明は1970年2月、楊矛とともに「呂、楊反革命集団」として激しく批判されていた<sup>40)</sup>が、この映画のときには現場に復帰していた。

1974年5月18日、徐景賢が上海映画製作所にやってきて『赤脚医生』（第7稿）の討論会に参加、上海市電影局、上海映画製作所の指導者と創作グループに対して「過去の17年の暗黒部分をもう少し鋭く描いてもいい。杜文杰はこのようにあからさまに描いてはいけない。でないと党内の走資派と呼べない」<sup>41)</sup>と意見を述べた。またこの時、主人公の名前を李紅華から「田春苗」に変えることになった。当時実在した先進的人物、李月華と名前が似ており、「現実のできごと」であるとの誤解を生まないためであった<sup>42)</sup>。

第8稿からは題名も主人公の名前の『春苗』と変わり、1965年の四清運動の後から始まり文化大革命初期の1967年までが描かれる。文化大革命前に二章をさき、文化大革命が第三章で描かれる。阿方おばさんの娘、小妹が衛生院に運ばれる途中で息を引き取るようになっていたのが、衛生院に運ばれてから杜文杰がいいかげんにあしらい、銭濟仁による誤診で死にいたるよう改められた。以前のシナリオでは李紅華と杜文杰の矛盾の衝突がそれほど色濃くなかったのに対

して、この稿からは杜文杰は修正主義衛生路線をとっており、春苗と杜文杰の闘争が一挙に激しいものとなった。どうあれ、結末は杜文杰は幹部政策の実施を受けて、誤りを認め、生産大隊に留まって春苗とともに合作医療をおこない、貧農下層中農から歓迎される。とどのつまり、杜文杰は「走資派の誤りを犯したよい人」であった<sup>43)</sup>。

1974年7月1日の「上海市党委員会指導者の『春苗』第8稿に対する意見」では、話を「十六条」(筆者注:1966年8月8日に決議された中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命に関する決定)の前にもってくるのは背景として早すぎないかという質問が出され、「そのようにしたのはブルジョア反動路線を描かないといけないからだ」と徐景賢が答えている。また「北斗七星を削れ」など江青から細かい指示があったことがうかがえる<sup>44)</sup>。この時大きな変更を求める意見も出ず、上海市党委員会によってシナリオ『春苗』(第8稿)が許可され、上海市電影局と上海映画製作所は『春苗』の撮影準備に入った。

## (2) 撮影から公開まで

撮影に入ってしまったら、テスト用フィルムが現像のため上海に送られた。上海市党委員会はテスト用フィルムを見て、主役を演じている曹雷の年齢が高すぎて春苗に合わない、女優を交代させるようにとの指示を出す<sup>45)</sup>。曹雷のかわりに新人の李秀明(1954-)が選ばれた。1975年1月初、撮影はおおむね終了する。

中国共産党第十期二中全会から戻った徐景賢は、1月13日、14日の二度にわたり上海映画製作所にやって来て『春苗』の試写用フィルムを見た。その後上海市電影局、撮影所の指導者、主だったスタッフを集めて緊急会議を開き、「フィルムはいい素材を提供してくれた。後の第三章(映画の文化大革命が開始してからの部分)は加工できるし創作できる素材だ」という「爆弾発言」を行なった。すでに取り終えているフィルムについて言ったのでスタッフは驚いたという<sup>46)</sup>。続けて次のような要求を出した。

走資派の典型的な人物像を作れ。

幹部政策の実施ばかりを考えてはいけない。

杜文杰を行き過ぎて描くことを恐れてはいけない。

杜文杰は映画の最後の場面に現れなくていい。誰かがたずねたらどこかで肉体労働に従事していると答えればよい。<sup>47)</sup>

杜文杰が反省して春苗とともに農村医療のために奮闘していこうとする場面がなくなり、「悔い改めない走資派」として描くよう指示したのである。「悔い改めない走資派」とは鄧小平のことを指していた。「幹部政策の実施ばかりを考えてはいけない」とは周恩来や鄧小平のとった老幹部の復活政策を言っていた。このような書きかえも当時の政治情勢が関係していた。1月8

日から10日まで開かれた中国共産党第十期二中全会では、鄧小平は党中央副主席、中央政治局常務委員に選出され、また周恩来の第四期全人代の準備作業を支持し、國務院総理に周恩来を留任させるという毛沢東の提案が採択されて、江青の「組閣」の計画は失敗に終わっていた。1月13日から18日まで開かれた第四期全人代第一回会議では周恩来が総理に、鄧小平は副総理に選出された。会議終了後、周恩来の病状が悪化したため、鄧小平が党と政府の日常業務をつかさどることとなった<sup>48)</sup>。このような情勢下で江青グループは周恩来や鄧小平への反撃の機会をうかがっていたのである。

3月12日夜9時半、徐景賢が突然上海映画製作所に現れ、『春苗』のスタッフ全員を集めるように命じた。徐景賢は「君たちはシナリオ改訂と言う難題に取り組みご苦労である。われわれもプロレタリアート劇映画に熱心な数人に改訂してもらった」<sup>49)</sup>と述べた。この「熱心な数人」とは上海市党委員会執筆グループの下の電影小組を指すと思われる。徐景賢は活字印刷されたシナリオを取り出し、スタッフにこれをもとに撮影しなおすよう命じた。そのシナリオは第三章の文化大革命の場面に変更を加えていた。主な変更点は以下の通りである。

1. 解放前に薬が買えなかったために父親が亡くなってしまったという話を春苗が語る場面は、方明と診察に出かけた帰り道ではなく、水昌伯に調合する薬をまず春苗自ら試そうとする場面に移す。そして後に春苗が水昌伯のために調合した薬を杜文杰が打ち捨てる場面と対比させる。こうすると春苗の政治的性格を突出させることができるし、走資派と国民党をつなげることができて一石二鳥である。
2. 「奪権」の場面では「きな臭さ」を強める。銭濟仁が摘発された後、春苗に理論、原則をふりかざして激しいことばで杜文杰を批判させ、続けて方明が「杜文杰のようなやつを院長にしているのか」とたずねると群衆が「だめだ!」と答え、水昌伯が「窓際へ追いやれ!」と叫ぶ。また杜文杰が誤りを認め改心する場面は削られた。こうして杜文杰は一挙に悔い改めない走資派となったのである。<sup>50)</sup>

鄧小平のことを指す「悔い改めない走資派」を描くことは江青グループからの指示であった。徐景賢は次のように述べている。

1975年に「鄧小平批判」と「右からの巻き返しに反撃する」運動が始まると、于会泳が二度にわたって江青の指示を伝えてきた。その内容は「大いに走資派を批判する作品を作り、更にレベルの高い走資派を描き、党内の二つの路線闘争を表現せよ」というものであった<sup>51)</sup>。

于会泳を通じて江青からの指示があったことを述べている。またこの時徐景賢が持ってきた

シナリオは最終的には自分を書き直したものであった<sup>52)</sup>。曹雷も次のように回想している。

1973年になって、文化大革命の必要性を表現することを映画のテーマとし、矛盾する局面のあの小さな衛生院院長を走資派にまで引き上げるよう上から指示されました。こうなると、われわれ数人では書けなくなったし、どのように書くべきかもわかりませんでした。もともとわたしたちの題材は生活の中から生まれたもので、このように理論や路線を振りかざすとは思いませんでした。のちに指導者はわたしたちでは彼らの要求を満たすことができないと考え、上海市党委員会の執筆グループが書くことになり、最後の草稿は徐景賢自らが筆をふるったようです。この時すでに撮影グループができており、もともとわたしたちはシナリオに口出しする権利はなくなっていました<sup>53)</sup>。

シナリオの書きかえが徐景賢主導になり、曹雷たちは口出しできなかつたと述べている。

4月21日<sup>54)</sup>、徐景賢は上海市電影局、上海映画製作所の両委員会、撮影グループの主だったメンバーを集め、完成したばかりの『春苗』の試写用フィルムについての意見を求めた。席上、謝晋が撮影グループのなかで次のような疑問がおこっていると報告した。「十六条」が指摘する運動の重点は党内の資本主義の道を歩む実権派をやっつけることであり、当時は主に劉少奇に向けてのことだった。しかし劇中では杜文杰を指している。これは適切なのか<sup>55)</sup>。この発言は現場レベルでは映画は鄧小平批判だと認識していなかったことをうかがわせる。それに対して徐景賢は「今回の運動の重点は党内の資本主義の道を歩む実権派をやっつけることだ。各レベルの走資派を指してるんだ。どうして劉少奇と下のものを分けられようか。劉少奇がいるからこそ下に各レベルの走資派が存在するんだ<sup>56)</sup>」と答え、劉少奇につなげて鄧小平を批判しようという意図をおわせている。徐景賢はまた初めの登場人物の字幕で杜文杰、銭濟仁、賈月仙の三人の否定的人物の名前を間をあげず一緒に表示するなどの細かい指示も出し、映画を5月23日までに完成させるよう命じた<sup>57)</sup>。5月23日というのは毛沢東の「延安の文芸座談会における講話」33周年を意識したのであろう。

5月11日、『春苗』の試写用フィルムが上海市党委員会に送られる。馬天水、徐景賢、王秀珍、王少庸の4名の常務委員は細かい点の修正が必要だが、文化部に送って文化部の意見をきいた後一緒に修正することに決定した<sup>58)</sup>。

上海市党委員会による審査の後、試写用フィルムは北京の文化部に送られた。5月13日に文化部で試写用フィルムについての意見を求める会議が開かれた。出席者は文化部の劉慶棠、王曼恬、張維民、電影局から亞馬、銭国棟、孫月枝、北京映画製作所の丁嶠、銭江、上海映画製作所の江雨声、謝晋であった。劉慶棠が賞賛し、張維民は「全体に感動的で教育的、深みもある」と述べ、王曼恬も「全体を通して政治的に力強く、教育的意義が大きい」と述べ、どちらも映画の教育的作用について言及している。細かい技術的な修正点が出されたほかは大きな変

更点はなく、最後に劉慶棠が「大きな修正を行なってはならない。5月23日に上映せよ。国内と海外で発行するように。コピーはできるだけ多く作るように。各省市に各軍区、40以上必要だ」と述べた<sup>59)</sup>。

5月14日に『春苗』の試写用フィルムを見た王洪文は、劉慶棠に電話で「総じていうならばすばらしい映画だ。文化大革命の場面もよろしい。修正意見は四つある。主要な点は文革開始後大きな波が衛生院に押し寄せているにもかかわらず静かすぎて時代の雰囲気が出ていない。様々な職業の大衆の場面から衛生院へと移動する、そうすると雰囲気がよく出る。春苗の反抗する場面を強めよ」と上海映画製作所に伝えるように命じた<sup>60)</sup>。

『春苗』が北京に送られて審査を通過し、フィルムが完成して撮影グループは解散した。しかし予定の5月23日になっても上映されなかった。文化部は張春橋の命令を受けて「しばらくは上映しない」と通知してきた<sup>61)</sup>。その背景には江青グループにとって不利な情勢が続いているという事情があった。5月3日、江青グループによる周恩来や鄧小平など多数の古参幹部にたいする反撃である「経験主義に反対する」というスローガンが毛沢東に批判され、江青は自己批判していた。また7月、文芸の整頓を痛感した鄧小平は、この問題について毛沢東に相談し、これによって、「党の文芸政策を調整すべきである」という毛沢東の書面での指示が7月14日に出され文芸整頓が始められようとしていた。またその後間もなく映画『創業』に対しても「大きな誤りはない」との毛沢東の指示が出た。このような状況下、『春苗』の行きすぎた表現は変えざるを得なくなっていた。

8月9日、徐景賢は上海映画製作所で『春苗』の主要なスタッフを集め、主として「奪権」の場面を修正するように求めた。方明と水昌伯が大衆を動員して杜文杰をやめさせる場面と、杜文杰が批判闘争をされた後、片隅で小さくなる場面の削除を求めたのであった<sup>62)</sup>。この「奪権」から思想批判への変更について徐景賢は「この場面はおもに杜の修正主義路線を批判しており、もともとは杜文杰を罷免することになっていた。しかし罷免すると復帰させる政策の実施を求める声があがる。今回はそれを表現しない。こうすれば映画公開後、杜文杰が「悔い改めない走資派」という説の基盤が固められる」と考えたという<sup>63)</sup>。

またこの席でスタッフから「社会では多くの人が杜文杰を走資派として描くことに異議をとなえている」という声があがった<sup>64)</sup>。現場レベルでは鄧小平批判だと認識していても実際に行っているのかどうか判断がつかかねたのだろう。徐景賢はそれに対して「社会で言われているこの映画にかんする流言はまったく根拠がない」「走資派というこの一点は絶対に変えられない」と答え、以後変更はしないと述べている<sup>65)</sup>。当時上海にいた王洪文は修正後のフィルムを見て「地方によって情勢が異なるのでしばらくはこの映画を上映しない。国全体の情勢を考慮しないといけない」<sup>66)</sup>と語ったという。

1975年7月から鄧小平は全面整頓に力を入れ、文革の行き過ぎの軌道修正が功を奏し、国民経済も安定し上昇に向かいつつあった。8月13日、毛沢東は北京大学中国文学科教員の蘆荻と

の談話で、『水滸伝』は宋江の投降を描いており反面教材とするのにふさわしいと述べた。14日、蘆荻は毛沢東の『水滸伝』に関する談話を文章にまとめて姚文元に届けた。姚文元はその日のうちに毛沢東に手紙を書いて、毛沢東の観点到賛成だと伝え、建国以後に書かれた『水滸伝』についての評論についての自分の意見を述べた。そして最後に新聞や雑誌を利用して『水滸伝』批判を展開したらどうかと提案した。すぐに毛沢東は同意するという指示を出した。8月下旬頃より江青グループは『水滸伝』批判を展開、全面整頓に対して大反撃を開始する。『水滸伝』批判は投降派批判の形をとりながら周恩来や鄧小平を暗に攻撃したものであった。

その勢いに乗じたかのように10月1日『春苗』が公開された。公開された『春苗』の内容はどのようなものになったのか。その内容を『電影文学劇本 春苗』（上海電影製片廠集体創作、趙志強、楊時文、曹雷執筆、上海人民出版社、1976年3月）から知ることができる。この電影文学劇本は映画公開後に出版されているので、あらずじ、せりふは映画とほぼ同じとみてよいだろう。あらずじは次の通りである。

1965年人民公社の衛生院に阿方お婆さんの娘、小妹が運び込まれる。衛生院の院長の杜文杰と銭濟仁医師はろくに治療しようともせず県の病院へ行けと言いつつ。治療をされなかったために小妹は衛生院で亡くなってしまう。その後、毛沢東の「医療衛生工作の重点を農村におこう」という指示がだされ、田春苗が「はだしの医者」となるため衛生院へ送られる。「はだしの医者」をよく思わない杜文杰と銭濟仁は春苗に雑用ばかりさせる。若い方明医師が春苗を助け、春苗は方明医師について医学を学ぶ。

湖濱生産大隊に戻った春苗は、薬箱を肩にかけて医療工作に従事する。阿方お婆さんの息子、小龍が肺炎にかかったとき、水昌伯が薬をもらいに衛生院へ行ったものの、春苗の書いた処方箋は「処方権」がないと衛生院で拒絶された。薬はもらえなかったが、春苗の懸命の治療で小龍は回復する。

春苗や方明の努力によって生産大隊に衛生室ができた。しかし春苗の医療活動を快く思わない杜文杰は医師の資格がないと春苗の医療活動を禁止する。

文化大革命が始まり、杜文杰や銭濟仁を批判する壁新聞が貼りだされる。杜文杰は「はだしの医者」養成班を作って状況を切り抜けようとするが、春苗たちから批判され、腰痛の水昌伯を衛生院が受け入れるよう迫られる。しかたなく水昌伯を受け入れたものの、春苗の調合した薬が原因で水昌伯の症状が悪化する。杜文杰たちはこれにかこつけて春苗と方明を攻撃しようと画策する。しかし水昌伯の症状はよくなる前兆であった。春苗は水昌伯の薬をさらに増やすため、自らが実験台となり薬を試す。

そのようなとき銭濟仁が水昌伯を毒殺しようとするが未遂に終わる。水昌伯が回復すると困るので杜文杰は救急車を呼んで県の病院へ運ぼうと企てる。春苗が水昌伯のために調合した薬は杜文杰によって地面に打ち捨てられる。群衆の前で二人の悪事があばかれ水

昌伯が再び春苗の調合した薬を飲む。

1967年、水昌伯の病気もすっかりよくなり、生産大隊には「はだしの医者」として活動する春苗の姿があった。

8月9日の徐景賢の指示通り「奪権」の場面を取りやめ、最終的には春苗が銭濟仁の悪事をあばき、杜文杰を批判するあらすじとなっている。『春苗』は最初の構想と随分と違ったものになったのではないかという質問に対して曹雷は次のように答えている。

初めの創作の意図とは確かに大きく違っていています。今になって思うのですが、わたしたちが以前に書いたシナリオになんら誤りはなかったと思うのです。「はだしの医者」はほんとうに賞賛すべき人たちで、当時の農村の医療衛生に多大な貢献をしました。ですからこのような人物を賞賛すべきで、このような精神を書かなければいけないのです。私たちは農村に行き、全身全霊を込めてシナリオを書き上げたいと考え、女優としても「はだしの医者」をうまく演じようと思ったのです。後になって「文化大革命の必要性を描く」というテーマになるとは思いもよりませんでした。<sup>67)</sup>

社会主義の「新生事物」としての「はだしの医者」を賞賛しようという意図から始まった映画は、鄧小平に矛先を向ける映画となったのである。

### (3) 『春苗』公開以後

『春苗』は1975年10月1日に公開されてから「四人組」が逮捕されるまでの一年間、「鄧小平を代表とする老幹部に対する大型爆弾となった」<sup>68)</sup>という。鄧小平らへの攻撃の道具となったのである。

1975年11月から鄧小平の政策方針に対して、江青グループは鄧小平批判として「右からの巻き返しに反撃する」運動を開始した。

『春苗』の公開二ヵ月後の1976年1月、『紅旗』第1期に初瀾署名の「文化大革命を讃えるすばらしい映画」と題する『春苗』についての評論<sup>69)</sup>が掲載された。初瀾とは国务院文化組の執筆グループ名で江青が指揮していた。いわば自画自賛である。評論では「映画は春苗と杜文杰の闘争、即ちプロレタリアート革命派と走資派の闘争が劇の矛盾の中心線となり、文化大革命を正面から表現し賞賛している」と評価し、「文化大革命が始まったばかりのとき、杜文杰が通告を出し経済主義を行い革命派を鎮圧できたのは、彼らの手にまだ権力があったからである」と鄧小平をあてこすっている。

1月8日の周恩来の死去によって江青グループの「右からの巻き返しに反撃する」運動はますます加速する。

2月1日から6日にかけて、江青と張春橋はそれぞれ于会泳らに走資派との闘争を描いた文芸作品についての伝達を行なった。「走資派との闘争をさらに掘り下げて描いた作品」を書くよう指示し、映画『春苗』、『決裂』、『第二個春天』、『戦船台』の京劇版を制作するよう手配した<sup>70)</sup>。京劇『春苗』の制作は上海京劇団に割り当てられた。『智取威虎山』のスタッフはすぐさま行動に移し、その年の9月末に上海徐匯劇場でリハーサルまで行なっていたが、公演前に「四人組」が打倒され、京劇『春苗』は立ち消えとなった<sup>71)</sup>。

3月、『紅旗』第3期に初瀾署名の「文芸革命を堅持し、右から巻き返しに反撃する」が掲載された。文中の「党内の悔い改めない走資派」とは鄧小平を指すことばであり、「『春苗』を彼（筆者注：鄧小平を指す）は映画半ばで「極左だ」と繰り返し非難して席を蹴って出て行った<sup>72)</sup>と『春苗』を用いて具体的に鄧小平批判を行なっている。この鄧小平が『春苗』を「極左だ」と非難した話はその後の『春苗』を用いた鄧小平批判の文章のなかでもたびたび使われる。例えば、3月13日に『解放軍報』「大是大非要辯清——斥党内那個不肯改悔的走資派對影片『春苗』的攻撃<sup>73)</sup>」のなかでも「彼は映画半ばで「極左」だと繰り返し非難して席を蹴って出て行った。これは革命大衆に相反する感情である」と非難し、「『春苗』を「極左」だと攻撃する悪辣な意図は、社会主義の新生事物を否定し、プロレタリア革命事業の継承者を否定しようとするものである」とし、「党内のあの悔い改めない走資派は『春苗』を「極左」だと攻撃した。これはまさしく文化大革命を根本から否定し、文化大革命の恨みを晴らそうとする彼の極右の立場を暴露した」と『春苗』に関連させて鄧小平批判を行なっている。

しかし1976年10月6日の「四人組」逮捕によって『春苗』は一転して「四人組」の罪状を告発、批判する道具となる。たとえば上海映画製作所大批判組「這筆賬一定要清算」（『人民日報』1977年6月25日）や唐乃祥「從『春苗』的出籠看「四人幫」篡党奪權的陰謀」（『人民電影』1977年第7期）などで、どちらも『春苗』の制作過程に言及し、江青グループの腹心（明らかに徐景賢であるが名前は出ていない）がどのようにかかわったのかを暴露している。

『春苗』以外の「陰謀映画」についても簡単に触れておこう。『歡騰的小涼河』、『千秋業』、『盛大的節日』の制作は上海映画製作所で行なっていた。いずれもシナリオの段階で徐景賢の秘書の劉家龍が直接関わっている<sup>74)</sup>。『歡騰的小涼河』は1976年7月1日に公開された<sup>75)</sup>。『千秋業』は10月の段階で95%撮り終えていたが「四人組」逮捕により制作中止、『盛大的節日』も途中で制作中止に追い込まれた<sup>76)</sup>。

いっぽう北京映画製作所で制作されていた『反撃』は江青グループの腹心の遲群が中心となってシナリオが作成され、9月にはほぼ完成していたものの「四人組」逮捕により公開が中止された<sup>77)</sup>。

いずれの作品も『春苗』と同様、シナリオ作成の段階で江青グループの腹心が直接関わっていたことがわかる。

### 3. 結語

呉迪は「陰謀映画」について「『四人組』およびその追隨者が1975年から76年にかけて実務派（鄧小平を主とする党内の老幹部）に反対するために組織され撮影されたもので、毛沢東の革命路線に忠実なプロレタリア階級の英雄的人物が党内の走資派に対して造反、奪権するのを描いた映画である」<sup>78)</sup>と定義しているが、『春苗』は初めは鄧小平を主とする実務派に反対するために計画されたものではなかった。1970年に曹雷が自らの体験から「はだしの医者」の農村医療への貢献を讃えるために構想を練ったものである。1966年から72年は劇映画の新作が一本も制作されない空白状態が続いたといわれるが、70年ごろから劇映画の題材を探し、シナリオを書き、劇映画制作に向けての準備がなされていたことがわかる。

1973年10月、シナリオの第6稿が完成した頃から上海市党委員会の徐景賢が自分たちの政治目的に合わせて改作を試みる。徐景賢は江青グループの腹心で、上海の文芸界で指導的役割を果たしていた。映画『春苗』の制作にあたっては中央とたえず連絡をとり、自らシナリオの書きかえにもあたった。その指導はシナリオの書きかえだけでなく監督の起用やキャスティングにまで及んだ。

『春苗』のシナリオの書きかえはその時々の政治情勢で細かく変化した。1975年1月には『春苗』ははっきりと鄧小平批判に的が絞られた。しかし現場で実際に制作に携わったスタッフは、上からの意図がはっきりと読み取れず、とまどっていた様子がうかがえる。

1975年10月1日の公開後、「右からの巻き返しに反撃する」運動に拍車をかけるように『春苗』をほめたたえ、それと同時に鄧小平を批判するという二つを兼ね備えた文章が新聞、雑誌に掲載された。映画本体のみならず映画評論までもが利用されたのである。1976年10月の「四人組」逮捕後、『春苗』は今度は「四人組」を告発、批判する文章のなかで使われた。「四人組」は映画を政治に利用したと批判されたが、立場が変われば「四人組」批判のためにまたもや映画が政治に利用されたのである。

『春苗』と同じ時期到北京映画製作所では『決裂』（1975年）が制作されている。『春苗』公開の三ヵ月後の1976年元旦に公開された。『決裂』は教育戦線における「走資派」との闘争を描いた映画であった。1月7日付の『人民日報』「無産階級教育革命的戦歌」と題する初瀾署名の『決裂』についての評論でも「教育革命大弁論」とあわせて映画の評論を行い「走資派」の批判を行なっている。『決裂』は「走資派」との闘争を描いた映画であるにもかかわらず「四人組」逮捕後、「陰謀映画」には入れられなかった<sup>79)</sup>。『春苗』との違いはどこにあるのだろうか。まずシナリオの書きかえに際しては北京映画製作所からの指示で監督の李文化（1929-）らがあたり、撮影台本完成後は原作者にも目を通してもらったという<sup>80)</sup>。シナリオ作成の段階で江青グループやその腹心の直接的な関与が見られなかったのが大きな理由であろう。また翟建農はもうひとつの理由として文革後2年間は華国鋒が政治を主宰していた時期で、華国鋒は「すべて

毛主席が批准し、すべて毛主席が話したことをわれわれは改めてはならず、批判してはならない」という「二つのすべて論」打ち出していた。映画『決裂』では毛沢東が肯定した「共産主義労働大学」を讃えており、この点によって『決裂』は難を逃れたという<sup>81)</sup>。監督の李文化は「陰謀映画」である『反撃』の監督もしていたので停職処分を受け批判されたが、1978年に経緯を詳しくしたための書面を胡耀邦に直接送った結果、現場復帰を許されている<sup>82)</sup>。文革期に制作された映画は一律に批判されたわけではなく、誰が関わったのか、そして批判を受ける時期の政治情勢にまでも左右された例と言えよう。

『春苗』のもうひとつの政治的側面に「人民の教育」という観点も存在する。映画は中華人民共和国成立当時から「教育の道具」としてとらえられてきた<sup>83)</sup>。それは文革中であっても変わりにはなかった。『春苗』は本格的に文化大革命を描いた初めての作品である<sup>84)</sup>。当時行なわれていた文化大革命がどのようなものであるか、またその理念を映像でわかりやすく人々に示そうとしていた意図も感じられる。また実際の現場で映画を作っていた人にもそういう認識が存在した。北京映画製作所の監督李文化は「当時監督として私の心の中で明確であったことは文芸は労働者、農民、兵士に奉仕し、プロレタリア階級の政治に奉仕するもので、映画は人民を教育する道具であるということだった」<sup>85)</sup>と語っている。これは多かれ少なかれ当時映画制作に携わっていた人の共通の認識であろう。

『春苗』における謝晋、白穆、呂其明のように、文革期の映画制作には文革前期に批判されていた人が映画制作に携わる例が多く見られた。上海だけでなく、北京でも「毒草」として激しく批判された『早春二月』(1963年)の監督であった謝鉄驪(1925-)、撮影の李文化も革命模範劇映画の撮影のために現場復帰している。革命模範劇の撮影においては「三突出」<sup>86)</sup>の原則を守らねばならず、たえず上から細かい要求が出された。映画は総合芸術であり、監督のみならず様々な分野で高い技術が必要である。新人が育っていない状況下で質の高い映画を求めるなら必然的にベテランに頼らざるを得なかった。文革は建国以後の十七年時期の映画の否定から始まったと言えるが、その十七年時期に活躍した人を使わざるを得ないという矛盾した状況が存在したのである。

新中国成立後、中国の映画界は『武訓伝』批判や『清宮秘史』批判など激しい政治の荒波にさらされてきた。その最も極端な例が文革期の劇映画の制作に現れたといえる。

## 注

- 1) 胡星亮、張瑞麟主編《中国電影史》中央廣播電視大學出版社、1995年9月、P285。
- 2) 翟建農《紅色往事》台海出版社、2001年4月、P447。
- 3) 華國鋒《在中国共产党第十一次全國代表大會上的政治報告》、《紅旗》1977年9期。
- 4) 注1、P290。
- 5) 上海電影製片廠批判組《揭批“四人幫”在上海炮製四部陰謀電影的罪行(1978年6月)》、吳迪編《中

- 国电影研究资料:1949 - 1979 (下) 文化艺术出版社, 2006年6月, P.450。原載は《“四人帮”是电影事业的死敌——文化部电影系统揭批“四人帮”罪行大会发言汇编》中国电影出版社, 1978年。
- 6) 注2の翟建農『红色往事』の中でも論及しているが、応観のものとかかなりの部分が同じ内容である。応観は翟建農のペンネームかもしれない。
  - 7) たとえば上海电影制片厂大批判组《这笔账一定要清算》,《人民日报》1977年6月25日や唐乃祥《从《春苗》的出笼看“四人帮”篡党夺权的阴谋》,《人民电影》1977年第7期など。
  - 8) 現代京劇『紅灯記』,『沙家浜』,『智取威虎山』,『奇襲白虎團』,『海港』,バレエ劇『紅色娘子軍』,『白毛女』および『ピアノ伴奏「紅灯記」,ピアノ協奏曲「黄河」,交響曲「沙家浜」』の八つの演目。
  - 9) 韩炜, 陈晓云《新中国电影史话》浙江大学出版社, 2003年3月, P.146。
  - 10) 《当代中国》丛书编辑部编《当代中国电影(上)》中国社会科学出版社, 1989年1月, P.323。
  - 11) 注2, P.477 - P.479。
  - 12) 应观《《春苗》:“阴谋影片”的开山斧》,《大众电影》2001年第5期。
  - 13) 『文匯報』の記事は未確認であるが,《红旗》1968年第3期に関連記事《从“赤脚医生”的成长看医学革命的革命的方向——上海市的调查報告》が掲載されている。
  - 14) 上海市委党史研究室《曹雷:《春苗》诞生的前因后果》,《口述上海 电影往事(上)》上海教育出版社, 2008年12月, P.246 - P.247。
  - 15) 注14, P.247。
  - 16) 注14, P.246。
  - 17) 注14, P.247。
  - 18) 国家广播电视总局电影事业管理局党史资料征集工作领导小组编《中国电影编年纪事(制片卷)》中央文献出版社, 2006年12月, P.195。
  - 19) 注12の应观《《春苗》:“阴谋影片”的开山斧》では『赤脚医生』の創作グループとして, 趙志強, 楊時文, 曹蕾(曹雷の誤りか)の3名が選ばれたとあり王蘇江が名前はない。王蘇江は途中他のグループに異動したので映画のスタッフのクレジットに王蘇江の名前はない。
  - 20) 注14, P.247 - P.248。
  - 21) 注2, P.450。
  - 22) 注14, P.249。
  - 23) 注12に同じ。
  - 24) 二十二院校编写组《中国当代文学史(三)》福建人民出版社, 1985年9月, P.16。
  - 25) 注7の上海电影制片厂大批判组《这笔账一定要清算》など。
  - 26) 「田春苗」となっているがこの時点ではまだ名前を変更しておらず「李紅華」が正しい。
  - 27) 注7の唐乃祥《从《春苗》的出笼看“四人帮”篡党夺权的阴谋》。
  - 28) 高皋, 严家祺《“文化大革命”十年史》1986年9月, 天津人民出版社, P.529。
  - 29) 注7の唐乃祥《从《春苗》的出笼看“四人帮”篡党夺权的阴谋》。
  - 30) 注18, P.200。注2の翟建農《红色往事》P.451では徐景賢の秘書の張家龍も派遣されたという。
  - 31) 注14, P.248 - P.249。
  - 32) 注12に同じ。
  - 33) 徐景賢『十年一夢』時代國際有限公司, 2004年4月, P.344。
  - 34) 代琇, 庄辛《谢晋传》华东师范大学出版社, 1997年9月, P.57。
  - 35) 注33, P.334。
  - 36) 魯韜はその後1976年に『新風歌』の監督をしている。
  - 37) 注12に同じ。
  - 38) 魏湘涛《一颗影星的沉浮 上官云珠传》中国电影出版社, 1986年11月, P.148。
  - 39) 注18, P.194。
  - 40) 注18, P.196。
  - 41) 注18, P.201。
  - 42) 注12に同じ。
  - 43) 注12に同じ。

- 44) 《上海市委领导对《春苗》八稿的意见(1974年7月1日)》,吴迪编《中国电影研究资料:1949 - 1979 (下)》文化艺术出版社,2006年6月,P288 - 290。上海映画製作所保存資料よりの転載。
- 45) 注12に同じ。
- 46) 注7の上海电影制片厂大批判组《这笔账一定要清算》。
- 47) 注7の上海电影制片厂大批判组《这笔账一定要清算》。
- 48) 注28,P536。
- 49) 注7の上海电影制片厂大批判组《这笔账一定要清算》。
- 50) 注2,P453。
- 51) 注33,P344。
- 52) 注33,P344。
- 53) 注14,P250。
- 54) 注2の翟建农《红色往事》および注12の应观《《春苗》:“阴谋片”的开山斧》ではこの会議が4月2日に開かれたとある。
- 55) 徐景贤《召集局,厂两委和摄制组主要创作人员谈对《春苗》样片的意见(1975年4月21日)》,吴迪编《中国电影研究资料:1949 - 1979 (下)》文化艺术出版社,2006年6月,P300 - P302。上海映画製作所保存資料よりの転載。
- 56) 注55に同じ。
- 57) 注55に同じ。
- 58) 《上海市委审查对《春苗》双片的意见(1975年5月11日)》,吴迪编《中国电影研究资料:1949 - 1979 (下)》文化艺术出版社,2006年6月,P303 - P304。上海映画製作所保存資料よりの転載。
- 59) 《文化部领导审看《春苗》双片的意见(1975年5月13日下午3点半)》,吴迪编《中国电影研究资料:1949 - 1979 (下)》文化艺术出版社,2006年6月,P304 - P307。上海映画製作所保存資料よりの転載。
- 60) 注12に同じ。
- 61) 注12に同じ。
- 62) 注2,P455。
- 63) 注2,P455。
- 64) 注7,上海电影制片厂大批判组《这笔账一定要清算》。
- 65) 注7,上海电影制片厂大批判组《这笔账一定要清算》。
- 66) 注7,上海电影制片厂大批判组《这笔账一定要清算》。
- 67) 注14,P251。
- 68) 注12に同じ。
- 69) 注33の徐景賢『十年一夢』P344に于会泳が文化部の執筆グループに「初瀾」の名前で『春苗』を肯定する文章を書かせたとある。このことであろう。
- 70) 国家广播电影电视总局电影事业管理局党史资料征集工作领导小组编《中国电影编年纪事(总纲卷)上册》中央文献出版社,2005年11月,P601。
- 71) 戴嘉枋《样板戏的风风雨雨》知识出版社,1995年4月,P228 - P229。
- 72) 鄧小平が『春苗』を「極左だ」と言った話は于会泳が毛遠新から聞いた話であった。これを徐景賢は鄧小平を攻撃するのに格好の材料だと考え、文章のなかに必ず入れるよう于会泳に進言したという。文革終結後、徐景賢に対して批判が行なわれた時、次のような証言があった。鄧小平が『春苗』を見た時に確かにこのようなことはあった。だが「極左だ」とは言っていない。半分まで見たところで鄧小平を呼びに来た人がおり、「就走,就走」と鄧小平が四川なまりで言ったので「極左,極左」と聞こえたのだという。(注33の徐景賢『十年一夢』P386。)
- 73) 《坚持文艺革命 反击右倾翻案风》人民文学出版社,1976年3月,P134-P141に所収。
- 74) 注18,P202-P207。
- 75) 注70,P604。
- 76) 注18,P207。
- 77) 注18,P123-P124。1976年12月3日,批判のための内部上映が行なわれた。

- 78) 吴迪《“文革”十年：中国电影的一场灾难》，《中国电影年鉴》编辑部《中国电影百年特刊》中国电影年鉴社，2005年7月，P201。
- 79) 映画の内容から現在では『決裂』を「陰謀映画」に入れることもある。(注9の韩炜，陈晓云《新中国电影史话》P151など)。
- 80) 狄翟《〈决裂〉纪事与分析》，《电影艺术》1993年第2期。
- 81) 注2，P442。
- 82) 注80に同じ。
- 83) たとえば《电影是很好的教育工具》，《人民日报》1949年10月30日など。
- 84) それ以前の劇映画『無影灯下頌銀針』（1974年）でも文革を時代背景としているが，約40分の短い映画であり，重点が古い医療路線の批判に置かれ文化大革命の成果についてはあまり強調していない。
- 85) 注80に同じ。
- 86) 文芸創作の原則で于会泳が《让文艺舞台永远成为宣传毛泽东思想的阵地》，《文汇报》1968年5月23日で提起，のちに姚文元によって「すべての人物のなかでは正面人物を突出させる，正面人物のなかでは英雄的人物を突出させる，英雄的人物のなかでは主要な英雄的人物を突出させる」と定義された。(注9の韩炜，陈晓云《新中国电影史话》を参照。)

## A Study of the Art and Literature in the Cultural Revolution

Satoko TSUJITA

### Abstract

“Chunmiao” was produced in the latter part of the Cultural Revolution and it was called “Conspiracy Film”. The Gang of Four took part in the process of this production. Finally, this film had been changed to the movie for the purpose of the criticize Deng Xiaoping movement.

**Keywords :** “Chunmiao”, Cultural Revolution, policy on art and literature, Conspiracy Film, criticize Deng Xiaoping movement